

援助行動の予測因に関する研究

— 援助行動と態度, 主観的規範との関連 —

栗 田 喜 勝 *

A Study on Predictors of Helping Behavior : The Relationship between Helping Behavior and Attitudes, Subjective Norms

Yoshikatsu KURITA *

The purpose of the present study was to validate Fishbein's theory (M. Fishbein, 1967; 1972) in the case of helping behavior. In the first study, 26 helpful episodes were selected from the sample of 43 female college students. The subjects rated 21 attitude items related to helping behavior in terms of their agreement with those items. The data were analyzed by the method of factor analysis, and 5 factors were extracted. In the second study, the multiple regression analysis was conducted to examine the relationship between these 5 factors of helping behavior and Fishbein's model. Results revealed that the effect of each component of the Fishbein's model varied with the factor of helping behavior. Attitude and subjective norm were effective in predicting each behavioral intention. Further, the component of the model on behavior strongly varied as the range of ego-involvement increased.

key words: predictor, helping behavior, Fishbein's model, ego-involvement

問 題

近年の社会心理学における援助行動に関する研究には、援助者の心理的過程（援助意志決定過程）をモデル化した種々のアプローチがあるが、中でも社会規範（social norm）を援助行動の規定要因の一つとしてモデルに取り入れた研究は多い（Latané & Darley, 1970²⁰⁾; 松井, 1981²²⁾; Schwartz & Howard, 1984²⁷⁾; 高木, 1986³²⁾ など）。

井上・田中 (1973)¹⁶⁾, Pomarzal & Jaccard (1976)²⁴⁾, Zuckerman & Reis (1978)³³⁾ らも、従来から態度と行動の関係を説明してきた Fishbein (1967)¹¹⁾ の行

動予測モデルに立脚して、援助行動の一つである献血行動と社会規範との関連を検討し、社会規範が援助行動（献血行動）の重要な予測変数であることを確認している。

Fishbein の行動予測モデルについては、一連の実証研究を通じてその有効性が検証されているが（Fishbein & Ajzen, 1975¹³⁾; Ajzen & Fishbein, 1977⁴⁾, 1980⁵⁾），このモデルについて略述すると以下のとおりである。

彼は、従来の態度という概念がある特定の対象に対する個人の信念、行動意図および行動の全体から抽象された仮説的変数であるので、ある特定の対象

* 吉備国際大学社会福祉学部
Kibi International University, Department of Social Welfare

に対する態度得点からただちに特定の行動を予測することはできないとし、特定の行動の予測を可能にする行動の予測モデル（式 1, 式 2, 式 3）を示している。

$$B \sim BI = [Aact]_{w_1} + [SN]_{w_2} \dots\dots\dots (1)$$

B：行動

BI：行動意図

Aact：行動 B に対する行為者の態度

SN：主観的規範

w_1, w_2 ：経験的に決定される重み

$$Aact = \sum_{i=1}^n bi ei \dots\dots\dots (2)$$

bi：行動 B がもたらす結果 i についての主観的確率（信念）

ei：結果 i についての評価

n ：信念の数

$$SN = \sum_{r=1}^n NBr Mcr \dots\dots\dots (3)$$

NBr：重要な他者 r からの期待についての規範的信念

Mcr：重要な他者 r に従う動機づけ

n ：重要な他者の数

この理論によれば、特定の社会的事象に対する行動（B）の直接の規定因は行動意図（BI）である。そして、行動意図（BI）は、行動（B）に対する態度（Aact）と主観的規範（SN）の 2 つの要因によって規定される。

行動に対する態度とは行動が自分にとって良いか悪いかの判断であり、態度の規定因は、行動から予想される様々な結果の認知的評価である。態度は、行動とそれぞれの結果との結びつきの強さについての関連性評価（bi）（行動がそれぞれの結果を生じる可能性はどれくらいかの予測）と、各結果の重要性評価（ei）（それぞれの結果が自分にとってどのくらい重要であるかの評価）との積の総和として定義される。

一方、主観的規範（SN）は、重要な他者（例えば家族や友人等）からの期待についての規範的信念（NBr）と行為者がそれぞれの期待に同調しようと

する動機づけの強さ（Mcr）との積の総和として定義される。また、NBr は個人規範（NBp）と社会規範（NBs）に分けられるが、個人規範（NBp）は、行動意図（BI）に含まれると考えられており（Ajzen & Fishbein, 1970²¹）、実際的には社会規範（NBs）を NBr として扱っている。したがって、主観的規範（SN）とはその行動が他者から期待されているか否かの判断である。つまり、主観的規範の規定因とは個人にとって重要な準拠する集団や他者が、自分の行動にどのような期待を持っているかについての認知的評価である。

このような特徴を持つ Fishbein モデルが、前述のように特定の援助行動（献血行動）の予測に有効であることは検証されているものの、様々な場面における各種の援助行動を予測しうことは現在のところまだ確認されていない。

援助行動については、従来、各研究者による概念規定の違いにより、それぞれ異なる観点から検討されたり、また、従属変数である援助行動の指標が思弁的にとらえられ、研究者間で異なるなどの理由から研究成果の非一貫性が生じ、知見の一般化が困難とされていた。そこで理論構成に対する分類学的、構造的アプローチ、つまり援助行動を何らかの外的な基準や次元によってタイプ分けした上で、様々な規定要因との関連を検討する必要性が指摘され、具体的な提案や実践研究が行われている（高木, 1982³⁰、1983³¹；Smithson, Amato & Pearce, 1983²⁹；原田, 1990¹⁵ など）。

そこで本研究では、まず多岐にわたる援助行動について分類学的アプローチにより類型化を行い、次にそれぞれの類型ごとに Fishbein モデルとの関連分析を行うことを目的とする。

方 法

従来、援助行動の実証的研究においては、特定の援助行動に関する実験や場面観察法によるものや、質問紙による場面想定法を用いたものが多い。しかし、実際の社会生活場面における援助行動は多岐にわたっており、特定場面に限定された援助行動のみでは一般性に欠けると考えられる。そこで本研究では、多岐にわたる援助行動の測定の高難しさを考慮して、質問紙によって様々な援助場面を提示し、各場面における援助経験について問うことにより援助行

動の測度とした。

1. 援助行動類型の選定（予備調査）

各種の援助行動を類型化することを目的として、被験者（F短期大学1年次生43名）に対して予備調査を行った。調査は1997年1月に講義室において集団実施した。

まず被験者に日常生活の中で、自分の周囲で見聞したり、自分自身が体験した手伝い、親切、手助け、救助等のいわゆる援助行動の具体例をできるだけ多くあげて下さいと尋ね、自由記述式で回答を求めた。得られた回答を内容分析するとともに、先行研究（松井, 1981²²⁾; 高木, 1982³⁰⁾; 原田, 1990¹⁵⁾）を参考にして、援助行動をとらえる26項目を選別した。次に選別したそれらの項目を後日再度被験者に提示し、いままでにそのような場面に会ったことがあるかどうかの有無について回答を求め、各場面ごと

に遭遇経験率を算出し、著しく低い項目（「乱暴されている人の救助や警察への通報」、「急病人の介抱や救急車を呼ぶ」、「道端でうずくまっている人に声をかける」、「万引きを見つけ注意する」、「酔っ払いに絡まれている人に声をかける」）は削除した。

結果的に21種類の援助行動項目について、それらの援助行動を行うつもりがどの程度あるのかを、「必ず行う（7点）」から「全く行わない（1点）」までの7段階尺度で回答を求め、得点化した。次に全21項目を用いて主因子法による因子分析によって因子を抽出し、varimax回転を行った。その結果、固有値1.0以上を基準に5因子解を得た。

因子分析の結果、因子負荷量が.40に満たない2項目（「忘れ物や落とし物を交番等に届ける」、「迷子を交番や案内所へ連れて行くなどの世話をする」）を削除し、残る19項目について解釈を行った（Table 1）。

Table 1 援助行動項目の因子分析結果と分類基準

各種の援助行動項目	遭遇経験率	I	II	III	IV	V	h ²	分類基準*
【小さな親切行動因子】								
1. 道順を教える。	98.9%	.84	-.15	.18	.07	.27	.84	A3B1C1
2. 器具等の使い方を教える。	78.0%	.78	.05	.17	.03	-.04	.64	A3B1C1
3. カメラのシャッターを押す。	90.1%	.76	.05	.32	.06	-.11	.70	A1B1C1
4. 落とし主に声をかける。	97.8%	.69	.02	-.06	.32	.05	.59	A3B1C1
5. 他人のためにエレベーター操作をする。	96.7%	.61	.23	.09	.01	.12	.45	A3B1C1
6. 乗り物内で、座席を譲る。	100.0%	.57	.27	.26	.02	.10	.48	A1B1C2
【社会的弱者への援助行動因子】								
7. 困っている障害者を援助する。	75.8%	.04	.81	-.03	.21	.12	.72	A1B2C3
8. 他人の荷物を網棚にのせたり、降ろす。	68.1%	-.09	.76	.08	.10	.19	.64	A1B2C2
9. 他人に代わって切符を買ったり荷物を持つ。	69.2%	.29	.61	.15	.06	-.07	.49	A1B2C2
10. 危険な遊びをする子どもに注意する。	86.8%	.08	.51	.23	-.20	.18	.39	A3B1C2
【奉仕活動（自我関与大）因子】								
11. 献血に協力する。	92.3%	.14	.04	.87	.15	-.01	.80	A2B3C3
12. ボランティア活動に参加する。	74.7%	.28	.13	.74	-.05	.18	.68	A1B3C3
13. 近所の葬式や引っ越しを手伝う。	48.5%	.19	-.03	.61	.16	.12	.45	A1B3C3
【金銭分与・返済行動因子】								
14. 小銭に両替したり、貸す。	70.3%	.13	.05	.16	.77	.02	.64	A2B1C2
15. 募金運動に協力する。	100.0%	.03	.10	-.02	.75	.09	.58	A2B1C2
16. 余分な釣銭を返す。	73.6%	.30	.32	-.08	.57	.05	.53	A2B1C1
【親切行動（自我関与大）因子】								
17. 転んだ子どもを助ける。	51.6%	.28	.27	.32	.11	.70	.76	A1B2C3
18. 散乱した荷物を拾う。	91.2%	.34	.23	.30	.16	.67	.73	A1B2C3
19. 他人に傘をさしかける。	94.5%	.22	-.03	.26	-.22	.44	.36	A1B2C3
固有値		9.61	2.58	1.62	1.31	1.05		
寄与率(%)		32.02	8.59	5.39	4.36	3.49		

* 援助に必要な資源（A1:労力, A2:金品, A3:情報）、援助に伴う損失（コスト）の大きさ（B1:小, B2:中, B3:大）、自我関与度（C1:小, C2:中, C3:大）

各因子の命名にあたっては、先行研究（松井，1981²²⁾）を参考に、3つの分類基準から各項目を検討して行った。用いられた第1の分類基準は、「援助に必要な資源（A1:労力，A2:金品，A3:情報）」であり、第2の分類基準は、「援助に伴う損失（コスト）の大きさ（B1:小，B2:中，B3:大）」、第3の分類基準は、「自我関与度（C1:小，C2:中，C3:大）」であった。各項目ごとの分類基準については、Table 1 にあわせて示した。

なお、これらの分類基準自体 Fishbein モデルの有効性の検証と合わせて、今後検討されるべき規定要因と考えられるが、ここではあくまでも Fishbein モデルに従って検討することを目的とするので、各因子の命名にあたっての参考基準として用いた。

第1因子は「1.道順を教える」，「2.器具等の使い方を教える」，「3.カメラのシャッターを押す」，「4.落とし主に声をかける」，「5.他人のためにエレベーター操作をする」，「6.乗り物内で座席を譲る」の因子負荷が高いが、いずれも援助に伴う損失（コスト）は小さく、自我関与度も小さいので日常的な“小さな親切行動”と命名した。第2因子は「7.困っている障害者を援助する」，「8.他人の荷物を網棚にのせたり、降ろす」，「9.他人に代って切符を買ったり、荷物を持つ」，「10.危険な遊びをする子どもに注意する」の負荷が高く、これらは援助に際して、労力や、ある程度の自我関与に伴う損失（コスト）を必要とするもので、“社会的弱者への援助行動”と命名した。第3因子は「11.献血に協力する」，「12.ボランティア活動に参加する」，「13.近隣への手伝い」の項目の負荷が高く、いずれも自我関与、損失（コスト）の大きい行動であり、“自我関与度の大きい奉仕活動”と命名した。第4因子は「14.小銭の両替、貸与」，「15.募金への協力」，「16.余分な釣り銭の返却」の負荷が高く、多少の金品を必要とするが、損失（コスト）のさほど大きくない行動であり、“金銭分与・返済行動”と命名した。第5因子は「17.転んだ子どもを助ける」，「18.散乱した他人の荷物を拾う」，「19.他人に傘をさしかける」の因子負荷が高く、自我関与度が大きく、ある程度の労力を伴う行動であり、“自我関与度の大きい親切行動”と命名した。

従って、以下の分析における援助行動類型としては、すべてこれらの5因子（19項目）を用いた。

2. 本調査

1) 調査の実施

1997年4月に岡山県内K大学および広島県内F短期大学の教室において集団実施した。

2) 被験者

K大学の2年次女子学生40名，F短期大学の2年次女子学生38名，合計78名。

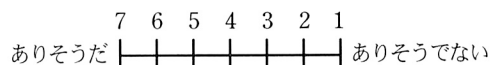
3) 質問紙の構成

質問紙は予備調査で得られた19種類の援助行動について、Fishbeinモデルの各構成要素（変数）を測定する質問項目で構成された。

B: 援助行動. 各種の援助行動について、援助経験の程度（1.ない－2.時々ある－3.よくある）を尋ねた。

BI: 援助行動意図. 各種の援助行動に対して、行動意図を表す刺激に対して、7段階で評定させた。

(例) “私は献血するつもりである”という刺激に対して



Aact: 援助行動に対する態度. 各種の援助行動に対して、Ajzen & Fishbein (1970²⁾; 1972³⁾) で使用されたのと同じ4つのSD評価尺度（賢明な－愚かな，有益な－有害な，報いのある-罰のある，良い－悪い）を設定し、それぞれを7段階で評定させその合計点を測度とした。

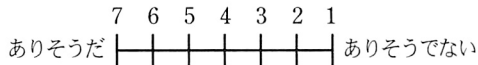
(例) “献血することは”という刺激に対して



NBs: 信念としての社会規範. 家族 (FaNBs)，友人や仲間 (FrNBs)，世間の人々 (GeNBs) の3種類の重要な他者からの期待についての規範信念を

それぞれ7段階で評定させた。

(例) 「私の家族は、私が献血することを期待している」という刺激に対して



なお、Mc：規範に従う動機づけについては、先行研究 (Ajzen & Fishbein, 1969¹⁾; DeVries & Ajzen, 1971¹⁰⁾; Schlegel et al., 1977²⁵⁾)において予測性を高める要因として認められなかったので省略した。従って、実際の主観的規範 (SN) の測定にはNBsの評定値のみを用いたので、以下、主観的規範 (NBs) と表記する。

結果と考察

1. 行動意図 (BI) における援助行動類型と態度 (Aact)、主観的規範 (NBs) の重回帰分析

各種の援助行動類型と有意に関連をもつ行動意図 (BI) の予測変数を明らかにするために、援助行動類型を目的変数 (従属変数)、態度 (Aact)、主観的規範 (NBs) を説明変数 (独立変数) とする重回帰分析を行った。結果は Table 2 に示すとおりである。

いずれの援助行動類型 (因子) においても R (重相関) は有意であり、行動意図 (BI) は態度 (Aact) 変数単独よりも、主観的規範 (NBs) 変数を加えた方が、より正確に予測されることを示している。そこで、各援助行動類型について予測回帰式の各変数の重み (W) である β (標準偏回帰係数) についてみると、「社会的弱者への援助行動」を除くと、いずれの援助行動類型も態度 (Aact) の方が Σ NBs よりも大きい。つまり、Aact の影響がより強いことを示している。

援助行動類型の中で、Aact がより大きいのは、日常的な「小さな親切行動」、「社会的弱者への援助

行動」であり、逆に「奉仕活動 (自我関与大)」や「親切行動 (自我関与大)」では小さい。つまりこれは、援助行動類型によって Aact の影響の大きさが異なることをあらわしている。

Σ NBs についても同様の結果が見られたが Σ NBs を構成する 3 予測変数についてみると、いずれの援助行動類型においても家族の規範 (FaNBs) が他よりも大きい。また、「奉仕活動 (自我関与大)」、「親切行動 (自我関与大)」において β が有意でないのは、友達の規範 (FrNBs) と一般規範 (GeNBs)、また「金銭分与・返済行動」では FrNBs のみであった。このことは、援助を行う際に金品や多大の労力、より大きな自我関与を必要とする場合には、友達や世間一般の規範から受ける影響は小さいことを示唆している。

2. 行動 (B) における援助行動類型と態度 (Aact)、主観的規範 (NBs) の重回帰分析

Table 3 は、行動 (B) における援助行動類型と態度、主観的規範の関連について、重回帰分析を行った結果である。

各援助行動類型 (因子) における R (重相関) をみると、いずれも有意であった。このことは、態度 (Aact) 変数単独よりも、主観的規範 (NBs) 変数を加えた方が行動 (B) をよりよく予測するということを示すものである。一方、各援助行動類型における β (標準偏回帰係数) をみると、「奉仕活動 (自我関与大)」を除くと、いずれの援助行動類型も Aact の方が Σ NBs よりも大きい。つまり、Aact の影響がより強いことをあらわしており、これは行動意図 (BI) の場合と同様の結果を示している。援助行動類型の中で、Aact がより大きいのは日常的な「小さな親切行動」、「金銭分与・返済行動」であり、逆に Aact が小さいのは「奉仕活動 (自我関与大)」、「親

Table 2 行動意図 (BI) における援助行動類型と態度、主観的規範の重回帰分析の結果

援助行動類型 (因子)	Aact-BI (β)	FaNBs-BI (β)	FrNBs-BI (β)	GeNBs-BI (β)	Σ NBs-BI (β)	R	R ²
日常的小さな親切行動	.43***	.33**	.20*	.26**	.38***	.84***	.71
社会的弱者への援助行動	.33**	.35***	.23*	.22*	.34**	.78***	.61
奉仕活動 (自我関与大)	.28**	.29**	.12	.09	.23*	.58***	.33
金銭分与・返済行動	.31**	.32**	.15	.21*	.29**	.71***	.51
親切行動 (自我関与大)	.30**	.30**	.11	.12	.21*	.62***	.38

β は標準偏回帰係数、R は重相関係数、R² は決定係数、* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 3 行動 (B) における援助行動類型と態度、主観的規範の重回帰分析の結果

援助行動類型 (因子)	Aact-BI (β)	FaNBs-BI (β)	FrNBs-BI (β)	GeNBs-BI (β)	Σ NBs-BI (β)	R	R ²
日常的小さな親切行動	.32**	.31**	.27**	.22*	.28**	.68***	.71
社会的弱者への援助行動	.24*	.25*	.23*	.19*	.20*	.54***	.29
奉仕活動 (自我関与大)	.08	.14	.1	.06	.15	.31**	.10
金銭分与・返済行動	.28**	.22*	.20*	.19*	.22*	.52***	.27
親切行動 (自我関与大)	.21*	.16	.12	.14	.19*	.42***	.18

β は標準偏回帰係数, R は重相関係数, R² は決定係数, * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

親切行動 (自我関与大)」であった。また、 Σ NBs についても同様の傾向がみられた。

次に Σ NBs を構成する 3 予測変数についてみると、いずれの援助行動類型においても FaNBs (家族の規範) の影響が他よりも大きい。また、「奉仕活動 (自我関与大)」では、Aact, NBs ともに β に有意な値がみられず、「親切行動 (自我関与大)」においては、FrNBs (友達の規範)、GeNBs (一般規範) が有意でなかった。このことから、実際の援助行動 (B) 場面では、援助に伴う損失 (コスト) や労力、自我関与の度合いが大きな行動において、様々な社会的規範から受ける影響が小さいことがわかる。

3. 援助行動類型における行動 (B) と行動意図 (BI) の相関

Table 4 は、各援助行動類型における行動 (B) と行動意図 (BI) の相関を示したものであるが、B と BI の相関は、Fishbein モデルの妥当性を示す要件の一つでもある。

この結果によると、日常的な「小さな親切行動」や「分与・返済行動」、「社会的弱者への援助行動」には高いとは言えないが有意な相関が見られた。一方、多大な労力や自我関与が必要となるボランティア活動や献血などの「奉仕活動 (自我関与大)」では有意な相関はみられなかった。これは、井上ら (1973)¹⁴⁾ の研究において明らかにされた結果 (BI と B の相関が喫煙行動では高いが献血行動では低

い) を支持するものであるといえよう。

総合考察

Fishbein の行動予測モデルは、態度 (Aact) および主観的規範 (NB) によって行動 (B) あるいは行動意図 (BI) を予測する上で有効であることが、投票行動 (Bowman & Fishbein, 1978⁸⁾、職業選択行動 (Ajzen & Fishbein, 1972³⁾、宗教行動 (Fishbein & Ajzen, 1974¹²⁾) などの種々の行動において確認されている。また、既述のように特定の援助行動 (献血行動) の予測においてもその有効性が確認されているが、本研究では、種々の援助行動を類型化し、それぞれの援助行動類型と Fishbein モデルの関連について検討を行った。

その結果、行動 (B)、行動意図 (BI) いずれの場合も、すべての援助行動類型において態度 (Aact) 変数単独よりも、主観的規範 (NBs) 変数を加えた方がより正確に予測されることが示された。これは Fishbein モデルの妥当性を示す結果といえる。しかしながら、NBs の構成要因についてより細かく検討すれば、行動意図 (BI) では、「奉仕活動 (自我関与大)」の FrNBs (友達の規範) と GeNBs (一般規範)、「金銭分与・返済行動」の FrNBs (友達の規範)、さらに「親切行動 (自我関与大)」の FrNBs (友達の規範) と GeNBs (一般規範) における β (標準偏回帰係数) が有意な値を示さなかった。また行動 (B) でも、「奉仕活動 (自我関与大)」や「親切行動 (自我関与大)」において同様の結果がみら

Table 4 各援助行動類型における行動 (B) と行動意図 (BI) の相関

	日常的小さな親切行動	社会的弱者への援助行動	奉仕活動 (自我関与大)	金銭分与・返済行動	親切行動 (自我関与大)
B-BI	.42***	.29**	.18	.34**	.21*

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

れた。

これらの結果は、援助行動類型の中でも援助に伴うコストや自我関与度がより小さく、気軽に行える援助行動（「日常的小さな援助行動」、「社会的弱者への援助行動」）では、行動（B）や行動意図（BI）に対して、主観的規範（NBs）の各構成要因からの影響が認められるが、コストや自我関与度のより大きな行動（「奉仕活動（自我関与大）」や「親切行動（自我関与大）」）においては、行動（B）や行動意図（BI）に対する友達の規範（FrNBs）や一般規範（GeNBs）からの影響が少ないことを意味している。

さらに、Fishbein モデルの妥当性を示す要件の1つである行動（B）と行動意図（BI）の相関についてみると、「奉仕活動（自我関与大）」を除く他の援助行動類型において高くはないものの有意な相関がみられた。中でも「日常的小さな親切行動」では他に比してやや高い相関がみられた（ $p < .001$ ）。この結果は、援助に伴う損失（コスト）や自我関与度、援助に必要な資源などの諸条件の違いによって B と BI の関連が異なる可能性を示唆している。

つまり、Fishbein モデルでは社会的事象に対する行動（B）の直接の規定因は行動意図（BI）であるとされ、その行動意図（BI）を規定するのは行動に対する態度（Aact）と主観的規範（NBs）であるとしているが、上述の結果をみる限り、行動意図（BI）が決定されると行動（B）が必然的に実行されるのではなく、行動実行にかかわる他の要因が作用する可能性を示しているものと考えられる。したがって、援助行動の予測因としては、態度（Aact）や主観的規範（NBs）以外に、行動（B）と行動意図（BI）の媒介変数についても合わせて検討する必要がある。

このように、本研究では各種の援助行動類型の違いによって、行動（B）と行動意図（BI）の関連、あるいは態度（Aact）や主観的規範（NBs）の影響が異なる結果が得られたが、このことは、態度（Aact）や主観的規範（NBs）の変数のみでは必ずしも行動を説明できないことを示しており、行動予測モデルとしての有効性に限界が認められた。

また、Fishbein & Ajzen (1975)¹³⁾ らは、ある特定の行動はその行動を遂行しようとする行動意図によって決定されるが、行動意図はその行動に対する態度と主観的規範の関数であり、その他の諸変数が

行動に影響を与えるとしても、それらは態度、主観的規範の2要因への影響を通じて間接的に影響を与えるに過ぎないとしている。

しかし、Schwartz & Tessler (1972)²⁸⁾ らが、臓器提供への志願を題材とした研究で、他者からの期待よりも個人の道徳的義務感が重要な役割を果たす場合のあることを指摘しているように、Fishbein モデルの枠組みに収まらない結果もある。

従って、この予測モデルをより有効にするためには B あるいは BI に影響を及ぼすと考えられる他の諸要因をも組み入れて、相互の関連についてさらに検討を加える必要がある。例えば、Fishbein モデルについては、その後、態度（Aact）や主観的規範（NBs）以外に第3の説明要因として“perceived behavioral control”（認知的行動統制）を組み入れた発展モデル（Ajzen, 1985⁶⁾；1987⁷⁾）や、“moderator variable”（調整変数）を取り入れた研究（Kraus, 1995¹⁹⁾）などもあり、各種の援助行動類型との関連においてさらなる検証を試みるべきであろう。また、援助行動の場合には他の諸研究で指摘されるような個人的規範意識（松井・堀, 1978²¹⁾、Schwartz & Howard, 1981²⁶⁾、箱井・高木, 1987¹⁴⁾）や、感情的側面としての共感性（Coke, Batson & McDavis, 1978⁹⁾、菊池, 1983¹⁸⁾、中里, 1985²³⁾）などの諸要因を予測モデルに加え、行動（B）あるいは行動意図（BI）との関連分析を行う必要もあると考えられる。

なお、前述のように本研究では援助行動の測定方法として、多岐にわたる援助行動の測定上の困難さから、援助行動の測度を、選別された24の援助場面を質問紙によって呈示し、経験の度合いを尋ねることによって求めた。したがってこれらの回答は、実生活における経験に基づくものであり、社会的望ましさの影響についてはある程度抑えることはできるものの、実際の行動を測度としていないため、現実事態における結果の再現性の保障がない。今後より妥当な方法を検討する必要がある。また、本研究における調査の対象者はすべて女子大学生であったが、性別によって態度（Aact）と主観的規範（NB）の（重みづけ、 β ）が異なるという研究結果もあり（井上・田中, 1973¹⁶⁾；1984¹⁷⁾）、合わせて今後の課題としたい。

謝辞

本論文の作成にあたり、貴重なご助言と励ましを頂いた岡山大学文学部多屋頼典教授に感謝の意を表します。

文 献

- 1) Ajzen, I., & Fishbein, M. 1969 The prediction of behavioral intentions in a choice situation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 5, 400-416.
- 2) Ajzen, I., & Fishbein, M. 1970 The prediction of behavior from attitudinal and normative variables. *Journal of Experimental Social Psychology*, 6, 466-487.
- 3) Ajzen, I., & Fishbein, M. 1972 Attitude and normative beliefs as factors influencing behavioral intentions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 1-9.
- 4) Ajzen, I., & Fishbein, M. 1977 Attitude-behavior relations: A theoretical analysis and review of empirical research. *Psychological Bulletin*, 84, 888-918.
- 5) Ajzen, I., & Fishbein, M. 1980 Understanding attitudes and predicting social behavior. Englewood cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 6) Ajzen, I. 1985 From intentions to actions: A theory of planned behavior. In J. Kuhl & J. Beckmann (Eds.) *Action-control: From cognition to behavior*. pp.11-39. Heidelberg: Springer.
- 7) Ajzen, I. 1987 Attitudes, traits, and actions: Dispositional prediction of behavior in personality and social psychology. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. pp.1-63. New York: Academic Press.
- 8) Bowman, W. D., & Fishbein, M. 1978 Understanding public reaction to energy proposals: An application of the Fishbein model. *Journal of Applied Social Psychology*, 8, 319-340.
- 9) Coke, J., Batson, C.D., & McDavis, K. 1978 Empathic mediation of helping: A two-stage model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 752-766.
- 10) DeVries, D.L., & Ajzen, I. 1971 The relationship of attitudes and normative beliefs to cheating in college. *Journal of Social Psychology*, 83, 199-207.
- 11) Fishbein, M. 1967 Attitude and the prediction of behavior. In M. Fishbein (Ed.) *Readings in attitude theory and measurement*. pp.477-492. New York: Wiley.
- 12) Fishbein, M., & Ajzen, I. 1974 Attitudes towards objects as predictors of single and multiple behavioral criteria. *Psychological Review*, 81, 59-74.
- 13) Fishbein, M., & Ajzen, I. 1975 Belief, attitude, intention and behavior: An introduction to theory and research. Mass.: Addison-Wesley.
- 14) 箱井英寿・高木 修 1987 援助規範意識の性別、年代、および世代間の比較 社会心理学研究, 3, 39-47.
- 15) 原田純治 1990 援助行動と動機・性格との関連 実験社会心理学研究, 30, 109-121.
- 16) 井上和子・田中国夫 1973 行動の予測因としての態度およびその他の変数に関する研究 (1) 心理学研究, 44, 195-206.
- 17) 井上和子・田中国夫 1984 青年期における行動の予測因に関する発達の研究 心理学研究, 55, 95-101.
- 18) 菊池章夫 1983 「向社会的行動」三宅和夫他編『児童心理学ハンドブック』. 金子書房.
- 19) Kraus, S. J. 1995 Attitudes and the prediction of behavior: A metaanalysis of the empirical literature. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 58-75.
- 20) Latané, B., & Darley, J. M. 1970 The unresponsive bystander: Why doesn't he help? New York: Appleton-Century-Crofts.
- 21) 松井 豊・堀 洋道 1978 大学生の援助に関する規範意識の検討 (その1) 日本心理学会第42回大会発表論文集, 1298-1299.
- 22) 松井 豊 1981 援助行動の構造分析 心理学研究, 52, 226-232.
- 23) 中里至正 1985 『道徳的行動の心理学』有斐閣.
- 24) Pomarzal, R. J., & Jaccard, J. J. 1976 An informational approach to altruistic behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 317-326.
- 25) Schlegel, R. P., Crawford, C. A., & Sanborn, M. 1977 Correspondence and mediational properties of the Fishbein model: An application to adolescent alcohol use. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 421-430.
- 26) Schwarz, S. H., & Howard, J. A. 1981 A normative decision-making model of altruism. In J. P. Rush-ton & R. M. Sorrentino (Eds.) *Altruism and helping behavior*. pp.198-211. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum.

- 27) Schwarz, S.H., & Howard, J.A. 1984 Internalized values as motivators of altruism. In E. Staub, D. Bar-Tal, J. Karylowski & J.Reykowski (Eds.) *Development and Maintenance of Prosocial Behavior*. pp.229-255. New York: Plenum Press.
- 28) Schwarz, S.H., & Tessler, R.C. 1972 A test of a model for reducing measured attitude-behavior discrepancies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 225-236.
- 29) Smithson, M., Amato, P., & Pearce, P. 1983 Dimensions of helping behavior. Oxford: Pergamon Press.
- 30) 高木 修 1982 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, 23, 135-156.
- 31) 高木 修 1983 順社会的行動の動機の構造 年報社会心理学, 24, 187-208.
- 32) 高木 修 1986 援助行動の意思決定過程の研究 — Schwarz, S.H. の規範的モデルについて — 関西大学社会学部紀要, 17 (2), 23-48.
- 33) Zuckerman, M., & Reis, H.T. 1978 Comparison of three models for predicting altruistic behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 498-510.

(受付：1999. 5. 1, 受理：2001. 8. 22)
